

わたしのくらし 地域の歴史⑭ 娯楽の殿堂「昭盛館」

―公民館白梅分館（白梅会館）のお隣に佐渡製作所さんがあります。昭和初期、ここには「昭盛館」という劇場があり、芝居や映画がかかっていたそうです。佐渡製作所さんの建物には当時の面影が現在も残されています。昨年11月14日に行った白梅歴史懇話会での皆さんのお話や地域の方への取材を通して少しまとめてみました。―

昭和初期の芝居小屋

熊川の芝居小屋として昭盛館がありました。この頃、同じような施設が羽村に錦亀館（きんきかん）、

二宮には二宮劇場があったそうです。福生には福生会館という施設がありました。本来の蕪買所としての利用がない時に使われていたようです。

昭盛館の成り立ち

昭盛館がいつころできたのかははっきりしませんが、当時を知る方々の話では昭和の初期ではないかということです。

創設者は内出の澤井重五郎さんで、澤井さんは多摩川の砂利採掘にかかわり、馬方として砂利運搬に携わっていました。現在、南公園に馬頭観音碑が設置されていますが、これは澤井さんが建立したものです。当初は澤井さん宅付近にあったそうですが、陸橋通りの拡幅によって現在地に移転されたそうです。

写真は昭盛館当時の面影を残している佐渡製作所（年代不詳）
写真提供：佐渡信廣氏

百畳くらいの1階席、2階席も当時、まだ子どもだった70代、80代の皆さんの記憶によれば、昭盛館の建物は舞台と百畳くらいの板の間にゴザの敷かれた客席、そして2階にはイス席がありました。入口を入ると左側（西側）に受付（木戸銭を払う所）があり、両側に下駄箱があります。そこで靴を脱ぎ、客席に入ります。右側（東側）には管理室のようなものがあり、ちょっとした売店もあったようです。この売店では森田六助さん（角六団子屋さん）がおせんべいや落花生、お菓子などを販売していたようです。また、客席に売りにも出ていたようです。

座布団持参で観覧

昭盛館での観劇の思い出を語っていただきました。祖父母に連れられて芝居や映画をよく観にいったそうです。子どもでしたから入場料がいくらだったかはわかりませんが、2階席は値段

が高かったようです。座布団を家から持参しゴザの上に敷いて見たそうです。冬場は半纏を着ていてもとても寒かった、とのこと。2階席は村の偉い方や駐在さんがよくみえていたようで、とてもうらやましかったそうです。

芝居や映画がかかっていた

演目は国定忠治や清水治郎長など股旅物のようなものが多かったようです。芝居では刀で切られた役者の額からばっと赤い血が流れるのですが、子どもだったからでしょうか？「なんで駐在さんがいるのに捕まえないんだ」と芝居と現実とが錯綜してしまっていたそうです。

菊の時期には昭盛館の前の空き地に地域の方々が丹精込めて育てた菊の展示があり、菊芝居がかかりました。旅芸人の阿久津秋水（あくつしゅうすい）さんが毎年来ていたそうです。

印象に残っている映画では「月よりの使者」、「愛染かつら」、東郷平八郎の国葬の映画がありました。無声映画には弁士が付きました。弁士に阿久津さんという方がいらしたそうです。奥さん、子どもさんがいて、子どもの頃によく遊んだということ。阿久津秋水さんと同じ人かどうかはわかりません。

昭盛館に芝居がかかる時には役者さんがチンドン屋を引き連れてチラシを配り歩きます。子どもたちはその後をついていったそうです。

ある方は熊川から砂川や村山、瑞穂、羽村をぐるっとついて回ったとのことでした。チラシ配りを手伝うと無料券がもらえたそうです。

当時、砂川にお住まいの方が昭盛館まで芝居を観に来たことがある、と話していましたが、近在から多くの方が来場されていたようです。

熊川の文化活動の拠点

昭盛館は地域住民の文化活動の拠点でもあったようです。

当時、消防団では演劇などの文化活動が盛んで、♪歌は為ちゃん絵描きは六さん 踊り踊るはおはらはあくとくじさん(花は霧島 たばこは国分……)という歌の節で)と歌に唄われていました。鍋一に野島為一さん、内出に森田六助さん、六助さんはとても器用な方で熊川神社の灯籠の絵を全部描いていたほど絵が上手だったそうです。そしてとくじさんは野口重利さんという方で、東京で歌舞伎役者をしていたプロだそうです。その方が特別出演して、野島為一さんと消防団の芝居をやっていました。熊川の人達は器用で上手だったそうです。

戦時中は兵舎に

戦争が激しくなると昭盛館は軍隊の兵舎として使われたようです。

熊川に高射砲陣地が設置され、兵隊は福生院に宿泊していました。熊川小学校(現在の福生第二小学校)には軍馬の飼葉がおかれていたなど、軍で使用していたとのことでした。

戦後、兵隊として昭盛館にいたという方が撤収する際に衣類などをたくさん持って帰ってきたのを見てとてもうれやましかった、という話もありました。

後に佐渡製作所さんが自宅を増改築した際にケヤキの木を伐採すると土中から銃剣の剣の部分が出てきたということです。佐渡製作所の現社長佐渡信廣さん(以下「佐渡さん」という。)につかいました。

戦後、引揚者の仮住まいに

戦後、部隊が撤収した後、昭盛館の中を間仕切りして7〜8世帯くらいの方が仮住まいされていた、ということでした。

その中にはリおはなさんという霊能師?の方がいたそうです。戦後、戦地から未だ帰還していない身内の安否を、米を持参して占ってもらおう母についていった、と

いう話も出されました。

昭盛館のその後

引揚者の仮住まいがいつ頃まで続いたかはよくわかりませんが、その後、佐渡製作所さんが工場として操業し、現在に至っています。

佐渡さんのお話では、工場の登記は昭和22年とのことでした。

※ 実は佐渡さんのお姉さん(坂戸美佐子さん)が祖父母から聞いた話では、戦時中、大田区で工場を操業していた祖父が疎開のために昭盛館の建物を購入していたそうです。疎開する間もなく終戦となり、昭和20年に川崎から転居してきたとのことでした。後に土地も購入されたようです。舞台であったであろう一段高

い部分をリフォームし、昭和34年頃までそこで生活していたそうです。また2階席部分には職人さんが住み込んでいたということでした。

佐渡製作所さんには昭盛館当時の建物の面影が今も残っています。太い立派な梁(写真1)、板塀やガラス窓(写真2)、2階席の柱にある燭台(ローソク立て、写真3)などを見ることが出来ます。

昭盛館が熊川の娯楽の殿堂であったことがよみがえってきます。

※間違いやお気づきの点などありましたら白梅分館にご連絡ください。また昭盛館についてご存知の方はお知らせください。

